

「シニア海外ボランティア」のケニア報告

2016 年度 1 次隊 石川 剛章

私は、ケニアの理数科の先生たちの研修施設で「シニアアドバイザー」として活動しています。職場も住居もナイロビ郊外の閑静な住宅街にあり、治安の不安もなく快適に過ごしています。ケニアに派遣されて 1 年 3 ヶ月が経過し、その間に見たことを紹介したいと思います。



まずは、写真を 4 枚。遊牧が認められているマサイの牛たちが道路を占拠して車が立ち往生。次は、ナイロビ郊外にできた新しいスーパー。その次は、ケニア人のほぼ全員がカールした長いまつ毛で、写真は小学生。最後は、巨大なバオバブの木です。

1. 海外で活動する若者たちとの出会い、それなくして私の活動は語れない！

私の立場は「青年海外協力隊(JOCV)」のシニア版(SV)です。応募時に 40 歳未満だと「JOCV」、越えていると「SV(シニアボランティア)」となります。ケニアには約 60 人の JOCV がいますが、彼らは全員ナイロビ以外の地方で活動します。SV は私を入れて 4 人ですが、10 月中旬に 2 人増えて 6 人になります。

若者たちとの最初の出会いは、福島県の二本松市でした。アフリカとアジアに派遣される隊員はここで、中南米などは長野県の駒ケ根で事前訓練を受けます。携帯の電波の届かない山の奥に JICA の訓練所があり、SV は 5 週間、JOCV は 10 週間過ごします。朝食前の 6 時半から集会と体操それに 1.5 キロ走で 1 日が始まり、基本的には語学訓練を中心とした現地が必要なことを習得します。部屋は個室ですが、基本訓練以外は 15 人くらいの班単位での生活になります。私の時は、「あいうえお順」でシニアが 1 人ずつ入りました。私の班には「う」の途中までしかいませんでしたが、その偶然の出会いが新鮮でした。気のいい若者ばかりで、土日だけ許される外出と飲酒を楽しみながらお互いのことを語り合いました。「こんな若者たちがいるのだ！」と大いに元氣と刺激をもらいました。彼らとは今も LINE と Facebook でつながっています。



2. ケニアの基本情報

1.) イギリスの植民地から、1963 年に独立し、今もイギリス連邦に属する

ケニアはサハラ砂漠以南の中心国で、国連の 2 つの本部がある。

ケニアはアフリカ系だけで 42 の種族からなり、それぞれが母語をもつが、公用語は英語とスワヒリ語。特に英語が重視され、教科書はすべて英語で書かれ、小学校の 5 年生からは「学校の中では英語だけ」という徹底ぶり。子ども達が普通に英語を話す。

2.) 宗教は、キリスト教が約9割で、次いでイスラム教

敬虔な教徒が多く、式典だけでなく、普通の会議でも最初と最後にはお祈りの時間をとる。「prayer」が突然指名されることもあるが、特に気にする様子もなく全員の代表として神に感謝の言葉を述べる。大統領選挙の投票日が「8月の第2火曜日」と憲法で決まっているように、日曜日には基本的に行事は入らないらしい。

3.) 「赤道直下」と「大地溝帯」が多様で過酷な環境をつくる

ケニアの国土は日本の約1.5倍で、人口は約3分の1。高温多湿な地域もあれば、冷涼な高地もあり、高温の乾燥地帯や半乾燥地帯も多い。「干ばつ」と「洪水」のニュースは毎年のもので、特に「干ばつ」が深刻。人々は条件がとんでもなく異なる土地で暮らしている。

例えば、イギリスは20世紀の初めにインド洋に面するモンバサからビクトリア湖のあるキスムまで鉄道を走らせた。その中継地点としてナイロビという街を造った。ナイロビは、マサイ語で「冷たい水」を意味し、1750mという高地にあり、ケニア山からの豊富な水に恵まれる。ナイロビを西に行くと、大地溝帯の東側の崖(リフト)に至り、最高地点は2600mを越え、その手前はインド洋からの湿った空気が雨を降らせるので農耕に向く。崖を下ると、サバンナ地帯が続く。日本の援助による地熱発電が盛んだが、地下の深い所から湧き上がるホットプルームを活用している。この南はマサイの人々が遊牧をした土地である。大地溝帯の底には「塩湖」が、北のエチオピアから南のタンザニアに抜けるまで続く。フラミンゴは美しい姿を見せるが、魚はほとんど生息しないらしい。そして、さらに西に行くと西側の崖に至り、崖の西側はビクトリア湖からの湿った空気が雨を降らせ、農耕に向く。メイズ(トウモロコシ)や小麦、紅茶などの生産が盛ん。ビクトリア湖は塩湖ではないので、多くの漁師がここで生計を立てている。



4.) 病気について

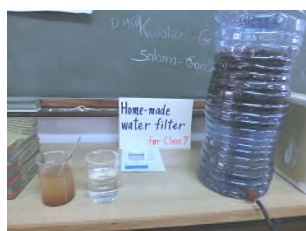
熱帯特有の病気では「マラリア」に気を遣う。ナイロビは涼しくマラリアを媒介する蚊がないので私は予防薬を飲んでいない。しかし、JOCVは任地によって予防薬が必需品となる。出張や旅行などでマラリアが心配される地域に行く時は、とにかく蚊に刺されないように蚊帳を吊るようにしている。時にはマラリアに苦しむJOCVを見ることがある。

HIV/AIDSは比較的西側の地域に多いらしい。ケニアを含むアフリカでは、伝統的な生活習慣や慣習が根底にあると聞く。看護や保健に関わるJOCVは圧倒的に西側に派遣される。

3. 私の活動に関連して

1.) 私の任務は、ケニアやアフリカの先生や生徒たちに役立つ教材や指導法を提供すること

日本での教員経験で何とか要望に応じている状態で、岡崎城西高校の36年間は私の財産だとつくづく思う。とは言っても、守備範囲が理科3科目と数学と広く、プライマリースクール(8年)もセカンダリースクール(4年)も対象なので、教科書を調べながら私の得意分野を活かして教材を開発している。



2.) ケニアの学校制度

プライマリーとセカンダリーで、合計12年間は日本と同じ。前者は義務教育でほぼ全員が通う。後者は学費もかなりかかり、就学率は6割ほどと聞くが、学年が進むにしたがって下がるらしい。日本と異なるのは、地域の住民が協力(ハランベ)して資金と資材を用意すると

か教会が支援するとか、いろいろな形態があるが、一定の教育条件を備えていれば「公立（パブリック）」として認められ、教職員の人件費が国から支給される。「理事会」が存在し、校長だけでなく生徒会長もそのメンバーだという。「日本人学校」も同様のようで、教職員の人件費以外は教室のテレビなども保護者の負担となるらしい。

実は、今の学校制度は来年度（ケニアは1月開始）から大きく変更になる予定。基本的には日本と同じ「6・3・3制」だが、日本の高校に相当する「シニアスクール」が、文系と理系、そして体育・芸術系の3種類に分けられるなどヨーロッパに近いものになるらしい。何にしても詳しいことは今後の話なので、情報収集に努めたいと思っている。

3.) 研修に来る先生や見学に来る生徒たちとの交流を楽しみながら

先生の研修は2月から6月がケニア国内、9月はサハラ砂漠以南の10数カ国が対象。徐々にアドバイスできることが増えて、彼らとの交流の中から次の教材づくりのアイデアが浮かんだりする。生徒は学校単位の見学が中心で、普段は生徒のいない職場なので、私にも楽しい時間である。その他にも、いろいろな団体や個人の訪問に対応している。



4.) 職場から出てケニアの学校を直に見るのも大事な活動

出張で行くこともあるが、JOCVの隊員たちの家に泊めてもらいながら、その土地の学校に行くこともしている。今までに合わせて20数校を訪ねた。

その中で一番強烈だったのが下の2つ。同じ公立のプライマリーでありながら、「これほどの差があっていいものか」と考えさせられた。左の2枚が地方ではよく見られるような学校で、右の2枚はナイロビというかケニアで一番と言われる恵まれた施設の学校。



それでも子ども達は明るい。理科や数学が好きで、将来はその道で活躍したいと熱く語る。



4. ケニアでの生活

1.) 食事・食べ物

野菜と果物はかなり安く手に入る。中国人が増えたこともあり、白菜やネギなどが売られているのは助かる。外食しなければそれほど食費を使わなくて生活できる。私の昼は職場の食堂を利用できるので、肉と野菜の栄養をここで摂っている。たんぱく源は日替わりで、牛、ヤギ、魚（養殖が盛んなテラピア）、豆、鶏。ちなみにケニアでは鶏が一番高い。



2.) お茶の時間は「must.(絶対)」

イギリスの影響を受けている1つが午前のお茶の時間。私の職場では10時半になると無料の「 Чай (ケニアンティー)」と揚げパンやサンドイッチ、蒸したサツマイモなどが提供される。昼食が午後1時からなので、この時間が待ち遠しい。

3.) 土日の楽しみ

ケニアにいる日本人は800人くらいと聞く。その中に野球部があり、試合がある時はできるだけ参加している。日韓戦が月1回あるが、最近では日米野球も定例化している。時には日本人だけで紅白戦も。他にもテニス部、サッカー部、ゴルフ部などがあり、スポーツ以外でも合唱や趣味の同好会などがあるらしい。個人的にも交流の機会を増やそうと努めている。



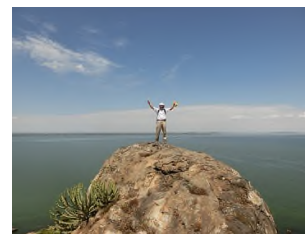
4.) ケニア旅の楽しみは壮大な自然と野生の動植物

そのスケールは想像をはるかに超え、任期の2年で見られるものは限られるが、できるだけ多くの土地を訪ねたいと思う。例えば、ナイロビナショナルパークはその面積が安城市よりも広い。植物の写真は長い説明を要するので割愛するが、今までの旅の中から印象的な写真をいくつか紹介したいと思う。

「赤道をまたぐ」「ケニア山第3峰4985m登頂!」「市場の逞しい女性たち」「金鉱山の男たち」



「地熱発電と温泉プール」「人類の起源の1つ」「ビクトリア湖は海だ!」「肺魚の実物を見た!」



「キリマンジャロと動物たち」「野生の雄ライオン」「ヌーの川渡り!」「赤くないフラミンゴ」

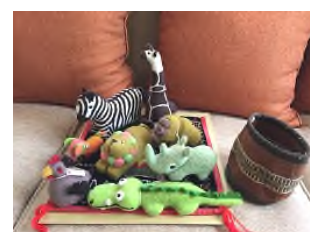


5. 日本とケニアの関係 (ODA などの支援を除いて)

1.) ケニア産の輸出品

ケニアの輸出品上位3品目は、紅茶・園芸作物・コーヒーだという。紅茶は「世界一」と聞く。バラなどの輸入は日本でも増えているらしい。コーヒーは隣国のエチオピア(モカ)やタンザニア(キリマンジャロ)ほどの知名度はないが、今後増加すると予想される。

その他、サイザル(リュウゼツランの1種)などの繊維を使った編み物やフェルトの置物も人気上昇中と聞く。



2.)「日本製の品質はいいが、高い！」

ケニアの輸入品は、石油関連、機械関連が多い。日本からは中古車が大量に輸入され、左側通行という理由からかほぼ独占状態。カメラなども含めて「日本製品の品質のよさ」をケニアの人々が認める。

ただし、生活用品はインドと中国が圧倒的で、情報通信関係は韓国が強い。道路や鉄道などは、中国が人も材料も運び込んで強さを発揮している。



3.)『少年ケニア』でケニアやアフリカを知った日本人

1951年から新聞に連載された作品が大人気となり、ラジオ番組やテレビ番組、映画などになった。私も小学生の時にテレビで見たような記憶がある。この作品が私をケニアに来させたのかと思い返している。

「でも、アフリカ（特にサハラ砂漠以南）は精神的に遠い！」というのが、多くの日本人の感覚ではないかと思う。日本から大学院の先生が、企業で働く社会人やアフリカで起業を考える人たちを連れてこられたことがある。「アフリカで仕事をする一番の問題は何か」と問われた時の私の答えが上記のもの。「住めば都」「人生至る所に青山あり」と私は実感している。



6. これからのケニア

これはまったくの私見です。1年ちょっとの間に考えたことをまとめてみたいと思います。

1.)「国」という意識をもつこと自体が難しい状況

日本と同じ47のカウンティー（「郡」と訳すが「県」の方が理解しやすい）に分かれているが、決定的に違うのは42もの種族がいて言葉も文化も違うこと。大統領選挙で、ある「県」では与党が99%なのに、別の「県」では野党が99%などという結果は外からでは理解できない。選挙結果には当然のことながら利権が絡む。それぞれの種族の生活がかかるから、とにかく激しい。8月に行われた5年ぶりの選挙は現職の勝利だったが、最高裁の裁定により「歴史的な再選挙」と決まった。10月26日再投票の結果はどうなるのだろうか。

理解しにくいのは、植民地時代の宗主国が勝手に決めた「国境」ではないかと思う。例えば、キリマンジャロは19世紀の後半にはケニアに属していた。ある時、タンザニアを領有していたドイツ皇帝が「アフリカ一番の山がほしい」とイギリス女王に申し込んだという。「誕生日祝い」としてケニア領からタンザニア領になった話は本当らしい。「この範囲がケニアで、お前たちはケニア人だ」と外から決められたことに私は同情する。

2.) 独立後50年以上が経過し、次の世代に期待！

日本の大学で学び、日本語が堪能な30代のケニア人と話したことがある。「選挙は2つの家の争いだ。それぞれが独立時の功労者一家ということは認めるが、その争いを今も続けることはナンセンスだ。我々の世代は違う考えをもち始めている」。

ケニアの「子ども大統領」に会ったことがある。ケニアの民主的な一面を象徴するものだが、ケニアに約23,000あるプライマリーの中から選挙を積み上げて10人の執行部を選出する。その中には特別支援学校の生徒枠もあるという。その時の子ども大統領は「本当の大統領になりたい」と夢を語っていた。種族や状況の違う生徒たちがケニアの学校問題を話し合い、各「県」の行政関係者と交渉したり、時には本物の大統領に面会したりするという。「ケニア」という国の存在を当然として生まれ育った次の世代に期待したいと思う。

